順正寺報　第五号

'91.

秋季彼岸会法要御案内

残暑きびしき候、貴家皆々様には御健勝にて、お過ごしの御事と存じ上げます。

さて、古来より日本民族の行事として親しまれて来た彼岸会（秋季）が近づいてまいりました。

当山「順正寺」でも壇信徒の総霊位をまつり、仏恩報謝の念いをこめて、下記の通り『秋季彼岸会法要』を厳修致します。

御承知の通り彼岸会は、「御先祖の徳をしのび、今日（こんにち）自分がある事のお陰を喜ぶ」大事な行事です。公私共御多忙とは存じますが、万障繰合せの上、御参詣下さいます様お願い申し上げます。

順正寺　住職

江口貫照

記

九月二十六日（木）

『結願の日』

午後一時より

読経　法話　おとき

以上

※自宅の御仏壇にて読経を御希望の方は、御電話を下さい。

彼岸入り　9月20日

お中日　9月23日（秋分の日）

結願　9月26日

※寺へ御遺骨をお預けの方は、彼岸中に（20日から26日の間）必ず御参詣下さい。

同行

江口 智流

「現れは、それとは別のいかなる存在者によっても支えられていない。」（サルトル）

〔存在の意義〕について先頃より考えるようになり、自分なりに思考し、暗中模索しているうち、ふと、哲学的（特に西洋哲学）には、どのように捕らえられているのかを少しでも知りたくなり、「実存主義」の提唱者の一人、サルトルに先ずは目を向けてみた。何故にサルトルなのかと言うと、〔実存主義―存在論〕という理論からまっさきに思い浮かんだのが、たまたまサルトルだったというだけで、深い意味は全く無いのでして、強いて申せば、私の名前が「サトル」、一字違いで似てるから、どこか親近感が有ったのかもしれませんね。そんな訳で、哲学に詳しい方に、『サルトルの実存主義はもう古い！』とか、『いや、実存主義ならマルセルだ、カミュだ、カントだ！』などとたとえ言われましても、「はぁ、さようですか、スミマセン。」としか申せませんので、あしからず、御了承下さい。

さて、それでは本題に入ります。

西洋哲学において「存在」とは、そこに現されたもの、すなわち、形として、音として、人の目や耳に入ってきたものに重点が置かれていると言っても過言ではないといえます。そのことは、文頭にあげましたサルトルの言葉からも伺いしれます。

他の哲学者の言葉や著書の中には、形や音だけでは、「現れ」だけではなく、別の力もそこには働き掛けている、と、述べられているものも確かに少くはありません。が、やはり多くの場合、最終的には、「現れ」としての「存在」という概念から抜け出せずにいるように思えます。何処までいってもこの世に「現れ」としてだけの「存在」である自己が、全てを考え、全てを拝み、行動するのであり、「現れ」がなければ何も生じないのであるという、「自己中心的」な考えに辿り着く。

そして、「実存主義」自体を否定している哲学によれば、今度は、存在の持つ大いなる意義をも他に委ねてしまい、最終的に残るものは、操り人形と化した自己だけということになります。

私のように若い人間は、サルトルのいうような「自己中心的思想」にどちらかといえば心引かれます。が、納得がいかない。スッキリしない。物足りなさを感じ

ます。今まで哲学というと、理想論・極論という感がありましたが、今、受けている印象は、許容量の少ない入れ物、そしてそれは日に日に縮んでゆく。人の在り方を解いていくはずの教えが、人をガンジガラメにしてしまう。故に、不完全さを感じるのです。

確かに、「現れとしての存在」が重要であることは分かります。しかし、「存在」の大いなる意義とは、単にそれだけで捕らえられるような薄っぺらなものではないのです。全ての人々が生死の苦楽を次々に受け渡され、受け渡していくという、面々と続く繰り返しの中、何時の時代になろうとも、誰であろうとも（お釈迦様でも、親鸞聖人でも、サルトルでも）、同じ苦楽を味わっているのです。

サルトルのいう「実存主義的存在」とは、生まれてこの世に「現れ」を示し、死んでしまったと同時に、「存在」はなくなる。つまり、「個人主体」の『点』としての思想にとどまっているといえます。

佛教で解かれている「存在」は、時間を超越したところに置かれています。「個人としての存在」が有り、その個々の「存在」が時を超越した状態で集積され、一つの世界を成している。そこには、不必要な「存在」というものは全くないのです。たとえ一つでも、この私一人の「存在」が欠けたとしても、その世界は成り立たず、ブロックが崩れるように、バラバラとなってしまうのです。つまり、一人一人がその世界の核を成し、その世界が有るからこそ、始めて「存在意義」を確かめる事ができるのです。自己の存在を越えたところに、真の「存在の持つ大いなる意義」が有るのです。

一切の生きとせ生けるものが同一の道を歩んでいるのです。例えそれが過去であろうと未来であろうと、同じ苦楽を背負い込んでいるのです。善人であろうと悪人であろうと。故に、「存在の意義」とは一切が平等に価値があるといえるのだ。「現れ」としての『存在』は、個々別々の形を持つものである。故に、「現れ」だけで物事を捕えるうちは、そこには平等はない。とすると、おのずと「存在の意義」にも差が生じてくる。差のあるような「存在」では意義も薄れてしまう。それほど「存在」を形成しているものは重厚なのだ。

「存在」とは、大いなる重荷にして我々が救われていくうえで必要不可欠なものである。

『一切の有情は、みなもって世々生々（せせしょうじょう）の父母兄弟なり。』（歎異抄　第五章より）

江戸時代、幕末から明治維新に掛けて人々が、薩摩だとか長州だとかの人間という観念を捨てて、日本人、

とならんとしたように、我々は、日本人だの、アメリカ、アフリカ、イラク人などという観念をひとまずどっかに置いといて、単純に人間、生き物という観点で「自己存在」を考えなければ、何時まで経っても「存在意義」を実感は出来ないと思う。

己を知るということは、同時に他人を知ることにもつながり、最終的には人間本来の有るべき姿を知る事につながる。けっして、自分に閉じ籠る事ではないのです。自己を知り、始めて他を知る。他を知り、始めて自己に目覚める。人間を知り、自他を知る。故に、自分と全ての他人（多くの先達やこれから生れいでる命、全てを含めた意味で）に本質的に差があるとすれば、到底、他を知ることなど出来ず、人間を知ることなど出来るわけがない。『存在意義』を考える時、自分・他人・人間（というよりも全ての生きとせ生けるもの）について一つ一つ別々に切り離して考えることはできないのです。全ての物が平等に相混って居るところに存在というものを確かめることができ、そこに有るのが存在の意義だからです。我々は同じ道を歩むものである。だからこそ、存在の意義があり、時代・形・生活様式などの違いがあっても、全ての生きとせ生けるものは、平等に救われるといえるのです。了

当、寺報では皆様からの御意見、御感想、御質問、また、詩、短歌、俳句などひろく募集して居ます。

どうか御協力のほど、宜しくお頼み申し上げます。

締切りに焦る額に光る汗

待つは原稿　残暑の涼風

早くも寺報もお陰様を持ちまして『第五号』を発刊する事ができ、嬉しく思っております。今回は、私自ら筆を取り、日頃感じていることを羅列させていただきました。と、申しましてもまだ書き足りないことが多々在りまして、懲りもせず、せっかく頂いたチャンスなのですから、また何時か思うパパに、あっ、違った、思うままに書かせていただきます。

それにしても、今回自分の文章をワープロで打っているとき感じたことですが、芝居をしていたらこそ思い付いたのではないかなぁ、というような捕らえ方をしている箇所もあり、そう考えると、自分が芝居をしていた時間は無駄ではなかったのだと、今まで以上に自信を持てるようになれ、感謝してます。　合掌

〒177東京都練馬区石神井町三の十七の四
☎03（3996）2064
順正寺